

展望

5

□追悼

竹内好□

竹内さんと私
竹内好の残したもの
竹内好
竹内さんとスキーの話
人々はつどい、かつ散ずる
とぎれとぎれの思い出

桑原武夫
日高六郎
藤田省三
橋川文三
飯倉照平
松枝茂夫

■甲

辞■

増田渉 久野収
谷口修太郎

田中克己 野間宏
鶴見俊輔 市川宏

最後の四個月

壇谷雄高

連載 ことばの政治学
連載 かれらが走りぬけた日

永川玲二
三木卓

事故のてんまつ

臼井吉見

1977年5月 第221号


筑摩書房

昭和三十一年八月二十一日発行(毎月一回)発行・通巻 第三二二号


昭和三十一年十一月二日 第三種郵便物認可

展望 第二二二号


特別定価三〇〇円



お風呂に



バスクリンは、みどりの香水風呂。お風呂に入ると、さわやかなみどりと香りがアツアツと広がりまわります。ジャスミン・レモン・ローズ木の香・コロン・ホワイトの6種類。バスクリンのお風呂は、疲労回復・肌あれ・あせも・しっしん・冷え症・神経痛に効果があります。



バスクリン

竹内さんと私

桑原武夫

三月三日の夜、鶴見俊輔君が電話で、竹内好さんの死を知らせてくれた。明日東上するといったが、私は少し風邪ぎみだったので、本葬には参上するが、それまでは万事よろしくとっておいた。

しばらくして、本葬が十日に決まったという知らせがあった。それでは間があきすぎる。明朝東上と決めた。

むやみに寒い朝、関ヶ原のあたりは粉雪だった。新幹線はひどく遅れたが、お宅へ着くと、お通夜は六時からということで、葬儀委員の若い人たちがしかなかった。私はこの家に二度伺ったことがある。照子夫人はそれをよく覚えておられた。一回目は丸山真男さんに連れられて、彼のうちから歩いてきた。二回目はあらかじめ電話をして行ったのだが、そのいきさつは竹内さんが私の全集第五巻に書いてくれた解説に詳しい。

埴谷葬儀委員長が間もなく見え、長老格の増田渉、松枝茂夫両氏に久しぶりでお目にかかった。棺の安置された部屋が広くないので、庭から拝礼して辞去される人も多かったが、狭い控えの間に、まさに膝を交えるといった形で集ったのは、大岡昇平、野間宏、丸山真男、藤田省三、日高六郎、鶴見俊輔、谷川雁、中野好夫、橋川文三、井上光晴、安田武、久野収、猪野謙二、市井三郎、尾崎秀樹。この連名が戦後の思想界あるいは硬派ジャーナリズムにおけるある人脈の流れともつれを示している。

十日の葬儀は無宗教で行なうので、弔辞朗読が式を中心となる。その人選について、埴谷さんと葬儀委員から意見を求められた。私の名も挙がったが、それは辞退した。私は、ここ二年ばかり故人に会っていない。年末、入院と悪い病名を聞いたが、お見舞いに東上してもいい。弔辞を読むのは適

当でないように思った。ただ、夫人から位牌に字を書くことを求められたのは、まことに光栄と思って拙筆をふるった。

「之」の字を省いて、単に「竹内好霊」と書くのがいいと思っただが、中国文学の専門家がたくさんいらっしやるので、その御意見も聞いてそうした。私はおしゃべりで、竹中半兵衛の墓にも「之」がないのですなどといった。三木城跡ちかくの畑の中にあつた小さく好ましい墓がふと思ひ出されたのは、私の大好きな別所長治、秀吉の大軍に囲まれて抗戦二年、糧食尽きて名文の遺書を残し城兵に代って自決した、この戦国剛直の名將の連想か、われながら不思議な気がした。

竹内好の名を知ったのはいつか、正確にはいえないが、多分、鶴見君が私に『指導者意識について』の載った薄っぺらな『綜合文化』を渡して、熱っぽく一読をすすめた時である。十日の弔辞の中でも鶴見君は『綜合文化』のことにふれ、それを五部買って、読ませたい人に渡したといっている。私が竹内思想の同調者になることを、思想家鶴見俊輔は期待していなかったであろう。ただ、彼は当時私と同僚になつたばかりだった。私は読んで感服した。

十日、千日谷会堂の控え室、増田渉さんと私は最年長ということで、夫人のそばに、並んでお茶を飲んでた。増田さんはひどく人なつかしげに、いろいろ話しかけられた。あなたの伯母さん、あの松江のお医者さんの奥さん、あの方はお元気ですか、といわれて私は驚いた。増田さんは戦後島根大

学の教授をされ、弁論部長のとき私が文化講演に行ったことを、私はすっかり忘れていたのだが、伯母の主人に診てもらわれたことなどあったのかもしれない。伯母は去年死にましたという、増田さんは感慨深げに、そうですか、とだけいわれたが、それから、あなたが竹内君を、これから偉くなる評論家だといって『文藝春秋』のアンケートで推せんしたのはいつでしたかね、といった。いつであったか、多分『日本共産党批判』が出たあとだと思いが、いちばん希望をかけている評論家として、竹内好、鶴見俊輔、梅棹忠夫の三人を挙げたことはよく覚えている。しかし『展望』を除いて、どの大雑誌も大新聞も、この三人に注目しようとはしなかったと記憶する、梅棹君が生態度を發表するころまで。増田さんは、竹内はそれを知らなかったのですよ。ぼくが、桑原さんが君を推せんしていた、と教えてやったのです、と言葉を継がれたが、それを聞いて竹内さんがどう答えたかには言及されなかった。おそらく、なんとも思わなかったのではなかろうか。

はじめて会ったのはいつか、もう思い出せない。ともかく『近代主義と民族の問題』(一九五二)を書いて国民文学論争の口火を切ったところだと思ふ。この論争は不毛に終わったように思うが、竹内さんはそのころから「思想の科学研究会」といっそう深い関係になった。この関係を無視して竹内思想の展開は考えられない。なにか会の内部に問題が生じたとき、

私を会長にしようという動きがあった、竹内さん自身が一夜、神田の駿台荘に説得に來られたことがある。例の論理的でねばっこい論法で攻められ、はずすのに苦労したことを覚えてる。

竹内さんが京都の私の研究室を訪れて、近代主義の定義について質されたのはいつだったか。私はいつもどおり、思ったままを気軽に答えたように思うが、竹内さんにはそれが一種快い感動を与えたようで、友情がそこで結ばれたような感じがする。

友情という言葉に軽いショックを覚えた読者があるかもしれない。しかし友情は、同一思想の系譜の上にのみ生ずるようなものでは恐らくない。もう少し深いところでつながるところがあったかもしれない。私との間に同質性を認めたい、と竹内さんは書いてる。しかし、さらに深いところでは、恐らく竹内氏と私は別であるだろう。竹内さんは戦争中、私の訳したアランの『芸術論集』を座右に置き、考えや文章がゆきづまった時にそれをよく開いたという。アランについて話し合ったことは一度もないが、竹内氏の思考と文章にはアラン風の骨太の基本的な合理主義があったように思われる。

ともに評価した人物として李嘉氏がある。竹内さんは『中国文学とヒューマニズム』で最高に評価している。私も戦争直後、一度だけ李氏と対談する機会をもったが、田舎でいささか戦争ばけしていた私は、論理をふまえてシャープに議論した感じがして、桑原の書いたものの中でいちばんつまらぬと書いた。この最後の部分は、出版社のほうに驚いて、懇願して、つまらぬという形容詞をはずしてもらったのであった。

谷川雁氏と竹内さんと三人で、うなぎを食ったことがある。客がすわらぬうちにはうなぎを割かぬという頑固な店で、待たされるうちに竹内さんは酩酊に近い状態になって「風紋」へ連れて行かれ、ここからこう落ちてという説明を聞いた。そこで、筑摩から『論語』というのが届いているはずだがという、言下に、ただひとつ「お遊び」とだけいって、にこやかに笑った。私は、あの註解は自分ではさして出来の悪いほうだとは思っていなかったのだが、彼の気持ちはよくわかるような気がして、盃を重ねた。

酒席の思い出は楽しく、いくつも思い出される。京都で、といつても十年ほど前だが、若い研究者たちといっしょで、お茶屋で痛飲した。そのころ、私は「ドンチャン騒ぎ」というのを侮蔑語とすることにつまらぬ反感をもっていて、好んでゲームをした。「ずぼんばえ」「相場拳」「コンビラフネフネ」「野球拳」。好さんは大いに協力的だったが、野球拳以外は無理だった。舞子相手に、ランナーになったら真面目に走り、手をあまり体軀から離さずに、アウト、セーフなどとやる姿が実に幼めいて愛らしく、いま痛切に思い出される。

することの美しさとはどういうことを示されて、快適な戦慄を覚えた。日本文学の特性はセンチメンタルにある、日本人は現代中国がまったく解っていないという説には私も賛成だった。竹内さんは、中国が西洋近代を拒否しつづけたことによって、かえって日本に先んじうる地点に立つという考えだったが、私はそこには同調できなかった。そのような抵抗が可能なのは中国のように、世界に光被した文化をもった自信のあるところだけではないか。フィリピン、ビルマ、タイ、等々はいかに抵抗しうるのか、それらの国は竹内氏の視野に入っているのだろうか、それを聞きたかった。

ナショナリズムの重要性ということを戦後に強調したのは、恐らく竹内さんが最初であり、またいつまでもそこに立っていたが、私もナショナリズム無視の議論は宙に浮くと指摘したのはわりに早く、少しおくれて重なる面があった。私の『フランス・ナショナリズムの展開』を、竹内さんがナショナリズム研究の基本となるべき作品と褒めてくれたことは大変嬉しかった。『人間素描』はお気に召し、特に京大東洋学の大家たちの素描には、絶賛というに近い評点が与えられ、自分も一生のうちにこういう文章が二つ三つ書ければ喜んで瞑目するが、書けそうにないという手紙をもらった。

しかし竹内さんは私に、いつも甘かったのでは、もちろんない。全集解説もなかなか手厳しく、私が自己を語った文章はすべてつまらぬこと、また社会時評のたぐいはすでに古び

酒の話をもうひとつ。これは一九六九年、小田実君の出版記念会のくすりで、竹内さんと映画の久保幸之介君と著者、それから当時小田の行くところへいつもついて歩いていた帯をしめた婦人、五人が銀座のバーにいた。十一時半を過ぎたので、その女性に、あなたはもう帰ったらどうですか、ご主人に悪いでしょう、車を呼んであげるから、と私がお節介をする、柳眉をさかだてて、いいの、主人が文句など言うもんですか、などといひ出すので、閉口して皆で店を出ると、好さんは通りがかりの大型の白タクを停めて、横浜、本牧までといつて承知させ、もう中へ乗り込んでいる。私は翌朝会議があるから堪忍してくれという、三人の男が一人の女性を交えて「卑怯者、去らば去れ」と、あたりを驚かすような声で歌い出したのだった。

竹内好はナショナリストといわれる。しかし、彼は情緒の否定と論理の追究において、加藤周一氏と同じく日本的でなかった。私はむしろ西欧的エクリヴァン、自立を何より重んじる真の「個人主義者」を感じる。彼は徒党、党派を嫌い、その最大のものとして国家権力を嫌悪した。

葬儀の日、控え室で雑談のさい、私は増田さんに、今の中国で竹内魯迅は知られていないように仄聞しますが、と聞く、そうなんですと答えた。魯迅は今や神格化されている。したがって、その受けとり方も統一化の傾向は不可避となる。

竹内さんの読みは深く切に、竹内流でありすぎるのかも知れない。ローマカトリック教会は聖書の自由解釈を好まなかった。そんな理屈を述べたわけではないが、当分そうでしょう。

竹内好の残したもの

竹内好さんから影響をうけた人たちは、恐らく想像以上に多いと思う。私もその一人である。私も大きな影響をうけた。私は、戦後、多くの尊敬する人たちの死にぶつかってきたし、それによって衝撃をうけたこともあった。しかし正直に言って竹内さんの死ほど強いショックをうけたことははじめてである。私が竹内さんからうけた影響は、影響というよりな生やさしいものではなく、決定的な教育といふべきものであった。しかし、私は、ものを書くとき、竹内さんの亜流の発想におちいることを、かえて竹内さんを冒瀆するものと考えて、極力それを抑制したことがしばしばあった。にもかかわらず、隠微な形で、竹内さんの発想が私の文章のなか

ね、と増田さんと私はうなずき合った。係りの人が呼びにきて、私たちは会場に急ぎ、増田さんは最初に立って弔辞を読みはじめ、その半ばで倒れられた。
(くわばら たけお)

日 高 六 郎

にしのびこんでいることがくりかえしあったと思う。

竹内さんの葬儀のとき、鶴見俊輔さんが、弔辞のなかで、竹内さんの初期の雑誌論文から二つをあげて、それをはじめに読んだときの驚きを述べていた。私の記憶にまちがいがなければ、ひとつは「指導者意識について」(雑誌『綜合文化』一九四八年十月号、真善美社)であり、ひとつは「中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識」(雑誌『知性』一九四九年五月号、国土社)である。鶴見さんは、そのときつけ加えて、この二つの雑誌がいずれも短命で終わったことを指摘した。それもまた意味のある指摘であり、竹内さんを弔うことも深いところであらうと感服した。この二つの文章は、私もそ

のころ読んで、軍隊の内務班で古参兵になぐられたほどのショックを感じたことを、いまもありありと思い出すことができる。またそれより先、一九四八年、竹内さんは「中国の近代と日本の近代」(東京大学東洋文化研究所編『東洋文化講座』第三巻所収)を書いている。これは竹内さんの文章のなかでも圧倒的な力感をもつ傑作だと思う。これもほとんど発表と同時に読んだ。

そのころ、鶴見さんはまだ竹内さんと面識がなかった。私も竹内さんを知らなかった。また私は鶴見さんを活字以外では知らなかったと思う。活字だけで、竹内さんの文章に感動した多くの青年がおり、そのなかに鶴見さんがおり、私もいたということである。

敗戦直後、かなりの数の雑誌が生まれまわっていた。しかし頁数は少なかった。そして、知識と思想にうえた若者たちは、財布をはたいて雑誌や単行本を買いたい、めぼしそうな論文や評論をさがした。その情報量のすべてを覆うことはできないとしても、それはほぼ個人の読書能力の範囲内であったと思う。私は、個人の読書能力や会話能力がなんとか追いつける程度の情報が市場に出まわっているのが、人間の精神の生産性にとっては好適だと思う。なぜなら、読書すき同士のあいだで、すぐ同じ評論や論文について話をかわすことができるからだ。多分、せいぜい車で二、三〇分で行ける範囲の

なかにひとつの都市がおさまることが都市生活者にとって最適であるように、精神の世界でもそういうことがあると思う。いまかりに竹内さんの文章を愛読する読者が偶然話をかわすことがあったとしよう。おそらくおたがいが竹内ファンであるということだけで、その二人あるいは数人は、相互にある種の信頼と親愛を感じるのではあるまいかと思う。つまり、装飾を好まない竹内気質は、人々を親愛のコミュニケーションにみちびきやすいからだ。竹内さんは孤高で孤独のようにみえる。しかし、だからこそ、竹内さんの呼びかけにこたえる人は多いのだ。

少し横道にはいった。話をまえにあげた三つの文章にもどそう。それら一九四〇年代後半に書かれた文章を読んで感嘆することが二つある。戦前『魯迅』(一九四四年)を書きのこととして、兵士として大陸にわたり、敗戦後一九四六年に帰国した竹内さんが、たちまちきわめて強烈かつ見事な形で、独特の思想をまとめあげているということである。そしてそれらは、竹内さんのそれからの生涯のすべての仕事と一直線に結びついている。その内面的な一貫性は驚くほどである。もうひとつは、それらのすべてが反時代的あるいは非時代的考察をふくんでいたということである。つまり、それらは、敗戦直後の、アメリカ的、西欧的、あるいはソヴィエト的モデルに一边倒して、平和と民主主義と人権(それ自体は、抽象的

一般的には積極的価値であることはまちがいないの啓蒙で覆いつくされてきたかのような当時の論壇学界の潮流に、異質の一石を投げられている。その個性の強さは、これまた目を眩らせるものだったと思う。内的一貫性と反時代的独自性。それは初期評論ですでにゆるがない竹内好の個性であった。

さて、さきにあげた三篇のうち、「指導者意識について」は、はじめ『世界評論』に掲載予定で書かれた。しかし日本共産党の指導的立場にある松本正雄氏批判であったため、編集者は共産党に気がねして、この原稿を没にした。四八年のことである。しかしそれは『綜合文化』にのることになった。「没にする人、される人、そのまた没をひろう人」という替え歌を聞いたことがある。泥酔した編集者が赤提灯でうたっていた。しかし、没をひろうには、当時それなりの勇気が必要だったのだ。「日本共産党に与う」は、一九五〇年五月号の『展望』にのったが、発想は「指導者意識について」と根柢においてつながっている。いまでは無党派インテリならば、日本共産党を擁護することにむしろ勇気が必要であるような風潮がある。当時はまったく逆であった。極端な例でいえば、それは、アメリカのベトナム侵略にたいするベトナム人民の抵抗戦争を批判するのと同じほどの勇気が必要だったと思う。もちろん、私は、ベトナム人民の抵抗を批判する

に日本共産党からは同調者のようにあつかわれたと思う。むしろ日本共産党は私ごときものをこそ批判し、竹内さんのような人物の意見にこそ、とことん耳を傾けるべきだったのだ。

しかし、竹内さんの真骨頂は、まえにあげた三つの文章でいえば、中国と日本を対比した「中国の近代と日本の近代」や「中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識」にあると思う。

竹内さんにはこうした視点で書かれた文章は、ほかにも多い。しかし、私は、たとえばこの二つの文章が、まだ中国共産党が勝利宣言をする以前に書かれているということに、動かしがたい重さを感じる。勝てば官軍ではないのである。もちろん、そこで中国共産党の勝利を予想しているわけではない。「中国の近代と日本の近代」でとりあげられているのは魯迅である。「中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識」では、国民党を支持する林語堂と、共産党を領導する毛沢東である。日本人の道徳意識の批判は、もっぱら林語堂の「北京好日」によっている。そして林語堂が中国共産党から否定されていることを承知の上で、しかもなお「北京好日」にあらわれている日本人の絶望的にくさった道徳意識をとりあげている。そして日中関係についての問題設定の仕方は、竹内さんの一生を通じてかわらない。

かつて日中国交回復以前に、朝日新聞は本多勝一氏を起用

ことは全くまちがいだと信じる。しかし、当時の多くの無党派インテリのなかにも、竹内論文には同調できないと考えたものが相当数いたことは確実である。その冒頭でいう。「日本共産党にたいする私の不満をつきつめていくと、それは結局、日本共産党が日本の革命を主題にしていけない、ということに行きつくのではないかと思う」。いまこの一句を、人々はどうのように読むだろうか。

私は、竹内好の勇気に感嘆した。しかし同時に、あまりに根柢的批判であることにとまどいも感じた。竹内さんは、一九六六年に書いている。「……発表当時は、友人からさえ反響らしい反響はなかった。ほとんど黙殺に近かった。賛成もされなければ反対もされない、というのには淋しいことだ、と魯迅は書いているが、当時の私の心境もそれに近かった」。内心賛成する部分を大いに感じていながら、息をひそめていたのかもしれない。私もその一人だったのかもしれない。竹内さんの反時代的独自性はきわだっていた。しかし、竹内さんは日本共産党がいうように反共主義者ではない。中国共産党への敬意の深さを見るがよい。むしろ、共産党や共産主義に強い期待を持っていたのだ。私などよりもはるかに強く。日本共産党への関心がおそらく私よりも強かったから、竹内さんはあの文章を書き、まともな反応を期待したのだと思う。私は、それほど熱っぽさを持っていなかったから、逆

して、中国における日本軍の残虐行動を具体的に報道させた。私は本多勝一氏の仕事を評価しないわけではない。朝日新聞の企劃に反対するわけではない。しかし、そのときには、中華人民共和国政府の方針は確定していた。第一に、筋を通した上での日中国交回復は早いほどよいということ、第二に、日中戦争のさいの日本の侵略行為は、ひとにぎりの日本軍国主義者の責任であり、日本人には責任がないというのが中国人民の見解であるということ、である。こうした中国がわの大前提のなかで、本多氏は、しかもなお日本国民は中国人民の好意に甘えるだけではすまされない、日本の中国侵略を徹底的に反省しなければならない、という視点でルポを書いた。それはそれでいい。しかし、そのことは、じつは日中国交回復後においても、いや回復後においてこそ、いっそう強調され、討議され、反省されるべきことだからである、私は考える。もしそうでなければ、さきの自己批判のルポは、国交回復のための手段でしかなかったのであり、その点で、「日本人の道徳意識」の低さが改めて証拠だてられたということになる。本多氏には持続の姿勢がある。しかし朝日新聞には、持続の意志はみとめられないように思う。

そして、きわめて逆説的なことながら、竹内さんが主宰した雑誌『中国』を日中国交回復を機会に廃刊にしたことは、雑誌『中国』の使命が終ったというよりも、問題意識の持続性

を訴えたからだだと、私は推察する。朝日新聞は、新聞は持続しているからこそ、問題意識は中断してしまつた。竹内さんは『中国』をやめることで、問題の持続を明らかにした。それは、その後の竹内さんの言論によつても証明できる。(こうしたところで、朝日新聞を楯玉にあげることは不本意だが、しかし総じて日本の大マス・コミには、このような無責任さが存在している。そのこともまた竹内さんの問題意識のなかにあつた。竹内さんは、どんなに自立的な言論機関を持つことを望んでいたことか。六〇年安保のあと竹内さんは私をさそい、「小新聞の会」という月例研究会をもつた。小新聞を発行したい、その方法は、というのがこの会の研究課題だつた。一言つけ加えておく。

「中国の近代と日本の近代」は、竹内好の歴史哲学であるが、その強い迫力は、戦後三十年にわたつて持続している。このことだけは、私には疑えない。「一九四五年だけが劣等部分における敗北であるはずがない。一九四五年を錯誤と主張するものは、そのことで優等生文化を保存しようとしているのだ。士官学校の優等生のかわりに帝国大学の優等生を認めるだけだ。」すべては明治維新革命に規定された進歩の方向に問題がある。明治維新を成功させた日本文化の優秀さが問題だ。「私は、日本文化は型としては転向文化であり、中国文化は回心文化であるように思う。」転向は、抵抗のないこと

りながら、その精神の明晰さをまったく失っていない。そして、そこには「無念」という文字があつた。私は、涙をおさえることができなかつた。

入管直前に『魯迅』を書き終えて出発した竹内好は、生涯の最後を未完の『魯迅文集』で閉じた。なぜ魯迅ではじまり、魯迅で終つたのか。そこには、魯迅への愛着という以上のものがある。つまり、日本人に魯迅をよませたいのである。このダメであつた、ダメである、ダメになりつつある日本人に。私は、竹内さんの動機を、このようにきわめて単純にうけとっている。しかしその動機は深いのだ。竹内好の文章をつらぬいている倫理性は、修身的ではなく権威的ではなく、さわやかである。しかし倫理的であるので、絶望的なのであるか。絶望的であるから、倫理的なのであるか。

妻がパリで思わぬ事件にまきこまれたあと、竹内さんは、わざわざ、横須賀の秋谷海岸に面する私たちの寓居にたずねてこられた。妻がしつこく、一日に四、五回電話をかけて、竹内さんを引っぱり出した。竹内夫人の笑い声が、電話の向うできこえたそうである。竹内さんは、日高さんは酒をのまなからつまらない、といつて招待をこわつた。妻は、橋川文三さんと一しょに来て下さいとねばつた。そして竹内さんは山形県天童市産の将棋の駒を手土産に、橋川氏同道でこられた。竹内さんの真意は、妻をばげましてやろうということ

ろにおこる現象である。つまり自己自身であろうとする欲求の欠除からおこる。自己が固執するものは、方向を変えることができない。わが道を歩くしかない。しかし歩くことは自己が変ることである。自己を固執することで自己は変る」

もう引用はやめよう。一九四八年に、竹内さんは一九七二年の日本を見通していたかのように思える。つまりそのころ反時代的考察と見えたことが、その後の歴史経過によって、事実によって立証されていく。しかし竹内論文は予言ではない。深い省察である。その上に立つての回心のうながしである。それが日本文化の核をとらえていたからこそ、いまの日本を考ふる拠りどころになるのだと思う。

竹内さんは、昨年一〇月一八日、京都でひらかれた岩波講演会で、「魯迅を読む」という題で講演をした。私と妻は、京都に居住しているので、この講演を聞くことができた。公の場所での発言は、これが最後だつたのではなからうか。それは、人々を感銘させる講演であつた。二月二日、入院中の竹内さんのお見舞にうかがつた。意識は明晰で、病気の経過と、『魯迅文集』の完成のおおよそのめどを話された。

最近『魯迅文集』第三巻が私の手もとに到着した。私はそのあとがきを読んだ。今年一月末の日付をもつこのあとがきを、いま私は引用するにしのびない。竹内さんは、病床にあ

だつたと思う。いま私の手もとにその将棋の駒がのこつていゝる。私は竹内さんとは、二回しか将棋をさしたことがない。一勝一敗だつたと思う。秋谷の家では、私は中国から持ってきた中国将棋を見せた。竹内さんはなつかしがり、私と二番さした。これは圧倒的に竹内さんが強かつた。竹内さんは若干の定跡を教えて下さつた。

妻は、そのときも、竹内さんにきんごん私の批判を述べた。その批判はあまりにあたつていたので、少し竹内さんも困られたらしい。ものかきはダメなんですよ、とやや私を弁護した。しかし、本心は、妻のいうことがもつともだと感じていゝるようであつた。

竹内さんの一貫性が私にはない。竹内さんが、ノーというその拒否の迫力が私には全くない。それは天性で仕方がない。しかし私は、今後は、少しはノーと言へる人間になりたい。京都の講演で、魯迅の「阿Q」にふれて、カオスからあらわされて、カオスへ消えていくことを言われた。今日ふと評論集を見ていたら、解題のなかで、「私は昔からカント流の範疇論的思考が苦手で、カオスから出発して何度でもカオスに立ちもどるデカルトの流儀に魅力を感じていた」という文章を発見した。カオスに竹内さんはつねに魅力を感じる人であつた。そしてその竹内さん自身が、カオスから来て、カオスへ消えていった。

(ひだかろくろ)

竹内好

藤田省三

竹内好氏は一つの定見であった。魯迅に迫ることをもって出発し魯迅文集を仕上げながら此の世を去ったからそういうのではない。もちろんそのことを含む。しかし、仕事の表面づらではなくてその仕事の進め方、論調、語法、語調、そうしたもののすべてにおいて彼は独自であり独自のあり方を通して普遍的であった。例えば、なぜ彼が魯迅に迫ることをもって彼の仕事を発表させたか、なぜ彼が魯迅文集の完成を彼の最後の仕事として選んだか、ということ自身が彼の問題であるだけではなくて我々の問題であり時代の問題であり現代日本社会の問題であった。そういうものとして彼は彼の魯迅理解を問題とした。魯迅研究者は必ずしも少くはない。けれどもそういう形で「なぜ」の問題を私たちの気にかけてくれる人は竹内好氏を除いて他にいない。彼が魯迅について語る時には、その論法においてその語調において、いつもその「な

ぜ」を彼自身の問題として解こうと努めている姿が示されていた。彼は解答を説明しようとするのではなく問題を問題として明かにしようとした。どうしてその「なぜ」が問題でなければならぬかを解き明かそうとした。その態度には些かの銜学性もなかった。(銜学的なポーズを彼は極端に嫌った)。そうであったから、彼が自分の問題にすることによって私たちも又自分の問題にしなければならぬようになっていくのであった。そういう問題性の説得において竹内好氏は抜群の力を備えていた。そうして、「試験問題正解集」のような理論体系的解説書が次第に空しさを増して来ると、自分で考えるべき問題の在り処を身をもって教える者が知的社会の一つの定見としてその重要度を増して来るのは当然であった。そのことを私は今ここで例を挙げて証明しようとは思わない。疑う人は一九三六年の「魯迅論」(新編「魯迅雑記」所収)、

一九四四年の「魯迅」(未來社「魯迅」所収)、「現代中国論」、「日本イデオロギー」、そして目下刊行中の「魯迅文集」を讀まれない。竹内好氏が自身の問題として引き出して来る問題がいかに普遍的な問題であるか、少く見積もっても普遍性につながる問題であるかということはこれらの書物に明かである、と私は思う。「ナシ」ヨナリスト竹内好」という通念は彼

の本体と真価を見誤らせることになりかねないのである。定見を一つ一つ失って日本はいよいようらぶれて来た。私たちの交友社会もますます淋しくなった。「野草」の中の一旬が思い出されてならない。私は致し方なく故事新編の途にいそしもうとするのである。

(ふじたしょうぞう)

竹内さんとスキーの話

橋川文三

竹内好さんは私のスキーの先生である。今年の冬は各地とも降雪が多く、私もひまがあれば、そして例年のように誘いがかかれば、行きたいとは思っていたが、結局今年はダメらしい。病床に竹内さんをたずね、どうも今年はむずかしそうだと話したところ、ダメだな、自分でひまをつくらねば、と叱られてしまった。

私も、とくに女房もすべりたいのだが、どうも今までの経験でいうと、やはり竹内さんが隊長で十人前後の組合せがも

っともいい。上手と下手の組合せが適当で、一日遊んだあとの晩食がすばらしい楽しみである。若い上手な連中と一緒にどうもダメだというのは私だけでなく、女房も同意見である。しかし今年竹内さんがお休みだからということで、さてどうしたものかと思案していたわけである。

これまで御一緒したゲレンデを数えてみると、八幡平、網張、万座、志賀、野沢、鹿島槍などであるが、さいごにお伴したのは去年の二月、猪苗代の東方の沼尻であった。例のよ

うに石田雄、岡山猛、中島岑夫、金子勝昭、松本健一、それに女性では安田武夫人、竹内さんのお嬢さん二人、私の家内という顔ぶれで、一級の石田君をのぞけば大体同じくらいの下手さ加減である。

沼尻にはゲレンデが三つあって、正面に二つ、もう一つはその奥にあるが、その奥の方ですべったとき、平素は沈着な竹内さんが、一メートルばかりの段差があるのに気づかず、ゆっくりすべっていたためすとんと落ちて尻もちをつかれた。その後についていた私も同じように落ちて尻もちをついたのだが、何しろスピードが全然なかったで、ごく自然な形でそうなってしまったのである。リフトに乗っていた女房がその光景を見ていて、一人ならともかく、二人とも尻もちをつき、ややしばし茫然としているのがおかしくて笑いがとまらなかつたといっていた。竹内さんも無然として「いや、全然きづかなかつたなあ」とつぶやかれたが、それが私の知っている竹内さんのスキーでの唯一つの失敗であった。

私をはじめ竹内さんにスキーの手ほどきをうけたのは、もう十数年前になろうか、鹿島槍に誘われたときである。その時も石田雄が一緒だったが、私はひとりであとから出かけることにした。北アルプスの山脈が一面の雪をおびて輝くのを見ながら、夜のあけ方に梁場についた。車で国際スキー場の宿にたどりついてみると、竹内さんも石田君もまだ休んでいた。はじめは竹内さんは「雪山でカンビールをやるのはいい

よ。スキーは別にやらんでもいいさ」ということであつたが、それが誰にでもはじめてスキーをはかせるときの常套手段であることを私はうかつにも知らなかつた。しかしスキー宿というところは、スキー以外になんらすることがないところである。竹内、石田の両氏がさつきと身仕度し、ゲレンデに出かけるとなると、私はこのことについて行くよりほかはない。ゲレンデにつくと、ただぼんやり雪山を眺めているわけにもいかない。何となくスキーをはくよりほかはない。スキーをすれば当然のように歩かねばならない。歩けばすべらねばならない。すべればころぶのも当然である。そしてころんだとき、私ははじめてスキー術の入口に立たされていた。ただそのままころんでいるわけにもいかない。竹内さんはいえばじつと立ったまま見おろしている。立上ろうとするが、スキーがすべってまたころぶ。そのくりかえしばかりでどうにも立上れない。しばらくきよろきよろしてみるが、まったく誰も相手にしてくれない。えい、とまた立上ろうとすると、すぐまたころぶ。いぜんとして竹内さんはただ見おろしている。とにかく平地でころぶとなかなかおき上れないことがわかる。——それが私のスキー入門の第一歩だつた。

その日の午前中はまずスキーをつけて歩くこと、そしてかにのよこばい、さらに直滑降を教わり、午後になるといきなりリフトで山頂にはこばれた。リフトを降りると当然のよう

気もちはあせるがなかなかおき上れない。やっと立上る。そして立上ったときの恐怖感——青木湖が直下に見えるのである。あたかも吸いこむように、なんらの障碍もないその湖の青さ——あそこまで何秒かかるか、という別の恐怖が私をとらえる。とにかくまるですべれない男がはじめて急斜面に直面したときの恐怖感であつた。この恐れ感じはとも矛盾しているようだが、いまもその時の印象は忘れない。

鹿島槍のゲレンデは典型的なすり鉢状で、竹内さんはその縁を斜滑降で降りながら私に教えて下さつた。竹内さんがまず降りて行かれる。その後姿の安定から私はなんだか帆前船がすべって行く感じのようだなあ、と思つた。のぼした両手の端からストックが真すぐ垂直に垂れている。ほとんどその姿には安定以外のものが感じられない。斜面で自然にとまると、向きなおって私に合図される。斜滑降はそれほど恐しくないから私もそのシェパールのあとを追って行く。傾斜はそれほど深くはない。しかしやはり私の怖いのは、斜滑降の姿勢のままその縁をのりこえ、とめどなくなりそうだという不安である。いきおいどうしてか、ころんでしまう。斜面だから起き上るのは平地よりらくだが、しかし逆に立上つたときに片足が滑り始める。エッジのこつがわからないので、いつどんなにすべるものか、見当がつかない。つまり斜面においては、平面とはちがってそのすべるには明らかに動力がともなっている。その上その自然な動力の作用を不自然な肉

体の力でむりに制限しようとするので、いきおい身体は支離滅裂の状態になる。ある時はどうしてこんな形になるのか、自分の身体なのに全くわけがわからぬ形態になっている。そんなときも竹内さんは決して手助けされなかつた。じつと私の動作を見ておられる。それがつらいから私はますますじたばたするしまつであつた。

こうして何度もころんでやっと平地にたどりつく。竹内さんは「まあね、いいだろう」といって早速カンビールを一本注文される。私もまわりにいる色彩も華やかな若手スキーヤーを見わたしながら、理由もないのにあたりを睥睨してビールをのむ。石田君はゲレンデではまるで姿を見かけない。ただ彼はリフトがある間はひたすらに昇りおりをしているようだ。まるですべるのが使命のようである。——これが私のはじめて経験したスキーの第一日であつた。

*

しかし私はもう一つ竹内さんの教えをうけた。それは中国語であるが、ほぼ七、八年ほどむかしとなつた。今考えるとまだみんな若かつたと思うが、同勢は鶴見和子、市井三郎、山下恒夫と私とであつた。「中国の会」の事務所が代々木にあつたころで、毎週金曜日、午前中の二時間である。

そのころ私はいま思うと更年期障害というのか、なんだかまるで何もする気がなかつた。もちろんつとめの方には出ていたが、それもどうやらノイローゼ気味のあぶない姿勢だ

ったように思う。そうした無力感にとらわれたときは何かまるで新しい語学にとりくむのがいいし、それには適当な先生があつた方がいい。そんな気持ちでいたところに、絶好の条件としてふつてわいたのが竹内さんの中国語学習の会であつた。そのころ私の無力感はちょっとしたもので、ひまな日にも何も手をつける気がしない。そんな日には自転車にのって遠くまであてもなく走りまわってくるか、そのあとで中国語の教科書を開いて、茫然とながめているか、そのうち自動的の辞書をめくって何か書きこみをやっているか、というような状態であつた。つまり何をしてもつまらないために、いきおいすることといったら中国語しかないという仕末だつたのである。

それが結果としてよかつたのか、悪かつたのかは知らないが、ともかく大杉栄なみに一獄一語という形になつたものと思う。そして私の考えでは、竹内さんが六十歳近くなつて私たちに中国語を教えようとしたのも、どこか相似た心境の作用があつたのではないかと思う。魯迅改訳という生涯の事業を思いたれたことも間接にそれに関係しているかもしれないとは、こんど竹内さんの書かれたものをよみなおして感じたことである。とくに「ユリイカ」の昨年四月号の私の対談の中で、竹内さんがいわれたことは、私にはよくわからないままに何だかおかしいなと思われた。もちろん武田泰淳さんの死の半年前であり、東北の松川浦へ海水浴に同行した

数ヶ月前である。竹内さんが御自分の死を予感されたということはずない。

しかし竹内さんがいわれたことは、かんたんにいえば一種の老いのことであつた。というよりも、たとえば「そうなんだ、『資治通鑑』ですよ。歴史は教訓であるが教訓であるためには実証が基礎になきゃいかん」というのが彼の立場でしょう。それに近いんですね、わたしは。もう青年じゃないからね、わたしは」といわれ、或は「一番大きな条件は齢とつたことですよ。老境に入りますとね、どうしても整理のほうに行くのよ。好事家つてもものがあるでしょう。齢とつてくると考証が好きになるといふのはそういうタイプね。タイプというか、大体まあ人はみんなそうじゃないかと思うんですがね」とか、さらには「わたしもね、日本の随筆類をだんだん見たくなってきた。ディテールだけで大局をシャットアウトしたやつをね」などといつておられる。そうした言葉のはらむニユアンスを私はよく知りえなかつた。いまそれらの語をふりかえると、竹内さんはもつと大きな生命の段階へ、つまり悠悠たる老境へと歩まれているのがわかるが、それがまさかこんな早く「死」へ赴かれるものとは思わなかつた。

それはともかく、私は多分一番熱心に中国語の勉強をしたと思う。ほかに何にも興味があつたのだから当然だろうと思つたが、そのとき普通の意味とちよつとちがつて私をひきつけたのは、何よりも新しい「語学」の興味であつた。とい

ても英語、独逸語、仏蘭西語といった語学とはちがつている。つまりそんな既成語学(?)というのではなく、なんだか初めから思いがけないことが耳に入り、それがやがてじょじょにひろがり、さいごには一切の語学知識のあやまりという方向へと私をみちびくようであつた。それは私がまるで中学校いらい聞いたこともない知識であつた。「つまり、日本の学校教育では、日本語に関する基礎知識を与える配慮がスッポリぬけているわけです。個別語学だけあつて、一般言語学または音声学へのアプローチが欠けています」(「知識の必要——日本語について」)と竹内さんのいわれるように、私ははじめて聞く「一般言語学または音声学」の知識におどろきを禁じえなかつた。

私はよく中学校ではじめて国文法を習い、また幾何学を習つたときのことを生涯のおどろきと言つたことがあるが、どうもそれだけとはことなり、全く別次元のおどろきであつた。「たとえば、方言には音が二とありあつて、学校の方と大学の方とは音がちがいます。このことは知識としては教えられないので、ふつう自覚されていません。そのため外国人から質問されても説明できないのです」というような話や、別に中国語の漢字音にあるNとNGの差別が片仮名表記のンとウ・イの区別となつてあらわれていることなどの不思議さなどがそれである。私はかつて中国の辛亥革命の黄興のことを Huan Xiu と新聞に誤記して竹内さんに叱られたことがある

が、このコウコウというのが Huang Xing だ、胡漢民(コカシミ)などは Hu Han-min である。ともかくそこには漢字と日本の音声との微妙な脈絡があるようで、そんな知識さえ私はなんら教えられずに外国語(ヨーロッパ系)をならつていたのである。

しかしこうした音声の知識は私にはやはりただの知識で、そのためかえつて私は発音には臆病になつたと思つたが、それは仕方がない。とくに四声の区別などは今でもでたらめであるが、それでも中国の文章を読めることが珍しくて、さきになつたように私はノイローゼの期間、一生懸命中国語をやつたわけである。

これもやはりそのころのことだが、私は「東湖隨筆」の現代訳をやつていて、唐の宣宗の瀑布の詩というのにおつかつた。「千巖万壑勞ヲ辞セズ。仰ギ看テ方ニ知ルベシ出処高キヲ、云々」という漢詩であるが、その出典が私には全くわからなないので困惑したことがある。「唐書」「旧唐書」などにその皇帝のエピソードはのっているが、そんな詩のことはどこにもない。それで困つていたのであるが、あるとき全くの偶然に芸文印書館の『統歴代詩話』という本の中でその詩を見つけたことができた。私の見つけたのは、「庚溪詩話」の一部であつたが、こんな偶然というのは珍しい。その時竹内さんから「へへへ、執念の勝利とでもいうかね」とほめていただいたのであるが、要するにその時期の私はしばらく中国語にとりつかれ

ていたのである。そしてそれを刺激するようにあおられたのがその週一回の講義だったわけである。

のちには石田君もこの中国語学習に参加した。彼はスキーと同じような熱心さでとりくんできたが、およそ半年でその会もおわりになった。しかし石田君は早くも「J・S・ミルと中村敬宇および嚴復」という論文をかいて中国語学習においてもその秀才ぶりを示しており、さすがその「一級主義」の空名ならぬことを証している。(彼は水泳、スキー、空手、ダンスほかなんでも、正規に一級ないし初段の認可をもらわずにはいない。)

*

竹内さんの趣味というと別に囲碁があった。大分晩年のことだったらしいが、暫くは筑摩書房が世話人で、日本棋院をつかってやっていた。私は結局一回も行かなかつたけれど、竹内さんは何回か出かけられたようである。江崎誠致ら文壇の猛者と、あとは埴谷雄高、井上光晴らを交えたトーナメントだった。私はそのもようを専ら井上光晴からきいていたが、さいごの時は竹内さんはただ見物するだけで打たれなかつたらしい。

かつて私は竹内、埴谷両氏の碁を評して「純真嬰兒のごとし」といったことがあるが、それは井上と私との碁が「乱臣賊子」の遊びに近いと述べたのの対比であった。もう何年前か、箱根の桜がさかりのころ、みんなで日本棋院の箱根の寮

に旅行し、そこで碁を打つたことがある。その時の優勝者はたしか江崎誠致さんだったと思うが、竹内さんと埴谷さんの成績は憶えていない。しかしそのときも、何かはにかむような表情で石を摘んでいた竹内さんの表情は憶えている。奇妙な話だが、碁を打つときだけは、竹内さんはしきりに首をかしげ、「おかしかったかな、ちがったかな」とつぶやいておられたようである。私も一回だけ対局したことがあるが、そのあまりにもの長考に負けてしまって、竹内さんの莞爾たる笑顔にぶつからねばならなかった。とにかく竹内・埴谷の碁は私のような乱臣賊子には性があわないところがあるが、それもそのレベルが高まると、井上光晴のように平氣の平左で

竹内さんにも埴谷さんにもからんでゆく。腕前は井上が三段、竹内さんが一級、埴谷さんが六級だったと思うが、これは形だけのもので、げんに竹内さんの通夜の夜、井上は少しよんぼりしたらしく、「本当にわからんなあ、おれもいつおしまいになるか、わからんもんなあ」と口走っていた。ドストエフスキーに匹敵する大小説をかかねば死なんという井上にしては、それはずいぶん心弱い発言であった。

彼は心から竹内さんが好きだったのである。一昨年私は行けなかつたが万座のスキー宿から電話をかけてきて、「おれなあ、スキーの天才かもしれないよ、竹内さんがそういわれたもんなあ」と大氣焔をあげていたのは井上であるが、さてそのスキーはどうなることか。(はしかわぶんそう)

人々はつどい、かつ散ずる

——竹内好さんとの十五年——

竹内さん危篤の電話を受けた時、そばにいた家人が、おもわずつぶやいた。「あなたにウルサイことを言ってくれる人が、これで二人ともいなくなってしまうわね。幾志さん、竹内さん……」

雑誌『中国』が休刊になってから、竹内さんと会う機会が、めっきり少なくなっていた。亡くなる一年半ほど前、魯迅研究会の会誌を借りて、小平の仕事場をたずねた。「こんな時でもないとお目にかかれないので」といいわけをする。竹内さんは「来なくていいよ」とひとりごとのように言った。そのころ、二、三の魯迅関係の仕事が、竹内さんに相談した結果だということ、私の方にまわされてきていた。魯迅のことなど私がるっきりわからないのを、竹内さんは知らないはずがない。そのあたりの事情もたずねてみたかったが、竹内さんはなにもふれなかつた。とにかく魯迅の翻訳

飯倉照平

のために、文字どおり寸暇をも惜しんでいることは、よくわかつたので、私は早々に引きあげた。

その魯迅関係の仕事の一つで、私は救いがたい粗忽をした。中野重治氏の文中に引かれた佐藤春夫氏の文章を、中野氏のものとして引用してしまったのである。そのことをあとで編集者から聞いた竹内さんが、「上手の手から水が漏る」と評したと知らされ、私は絶句した。それは雑誌『中国』で失敗をした時、よく竹内さんが口にしたことばであった。だが私は同時に、「その人の致命傷にこそ本質があらわれる」という、竹内さんのもっと痛烈な一句を思いうかべていた。

竹内さんがどんなことばを口にしようと、私の耳にはいつでも、もう一つの竹内さんのことばが鳴りひびく。たとい何年か会わないでいても、こんな時に竹内さんならこんなことばを吐くという、そのことばだけは、容赦なくおそいかか

てくる。私にとって、竹内さんはそのような存在である。いや私だけではなく、竹内さんに接した多くの人にとっても、そうであるにちがいない。

私は、このような場所をかりて、竹内さんとの私的なかわりをするすことには、ためらいを覚える。しかし、そのような多くの人のうちの一つの場合として、それを許していただきたいと思う。

なりゆきとして、家人の話に出てきた幾志さん——幾志直方さんについても、ふれないわけにはいかないだろう。幾志さんは、私の高校時代の世界史の先生で、私を東京に連れ出し、いわば竹内さんと出会うきっかけを作ってくれた人である。

東大文学部在学中は、かなりの活動家だったらしく、当時の警察側の記録に、アタマという変名(?)つきで出ていたのを見て、おどろいたことがある。その東洋史を出たあと、博文館につとめ、戦争末期には、回教圏研究所で野原四郎さんや竹内さんたちと、いっしょに仕事をしていたこともあるという。くわしいいきさつはわからないが、その幾志さんは、朝鮮戦争前後の何年か、千葉の成東高校で先生をしていた。私は敗戦のあくる年に旧制中学に入り、そのまま新制高校をおえるまでの六年をそこですごした。あのころの高校には、ほかにユニークな先生が何人もいて、私たちはかけが

やめ、昼の授業へ出られるようになってからも、沈従文や郁達夫ならばともかく、魯迅にはまったくしたしめなかった。たまたま帰りの電車でいっしょになった時、私が『詩経』や六朝の樂府に興味を持っていると言うと、竹内さんはとても信じられないといった表情をした。学生同士でよく遊びにいったのは、近くにあった松枝茂夫先生のお宅であった。卒業の前後まで、私は竹内さんの家には、ほとんど行ったことがなかった。

大学でいつも竹内さんを取りまいていたのは、『北斗』という雑誌に関係していた、いかめしい顔つきの(と当時は思った)人たちであった。いま調べてみると、『北斗』は、一九五四年から五九年にかけて、十八号まで出ている。中国文学研究会の戦中からの同人たちに、戦後世代が加わってやった仕事に、竹内・岡崎編『現代中国の作家たち』(一九五四年)、中国文学研究会編『中国新文学事典』(河出文庫、一九五五年)がある。それらの仕事を手伝う過程で、戦後世代が独立して中国文学会を結成し、『北斗』を出すにいたったらしい。大正の末から昭和五、六年あたりに生まれた世代で、出身校もさまざまである。

『北斗』のメンバーは、中国文学研究会の人たちとの親交の度合いも深く、それだけ竹内さんへの傾倒も強かったようである。あとにつづく私たちの世代とは、あきらかに一線を画していた。そこで都立大の学部を出た連中が中心となって、一

えのない体験をした。

私が高校を出て千葉市の病院で働くようになったころ、幾志さんもその郊外へ引っ越してきて、定時制の先生をしながら、東京の博文館新社へかよいはじめた。二年後、私もそこへつとめさせてもらえることになり、東京へ来たら夜の大学の口から聞いたように思う。もっとも幾志さん自身は、のちに千葉で日中友好運動にたずさわるようになってからも、終始竹内さんに批判的であった。

竹内さんの場合と同様、私が幾志さんからまなんだのは、その学問であるよりは、むしろ生き方そのものであった。人生の選択はまるでちがっていたが、かたくなと思えるほどの厳しき、なにひとつゆるがせにできない几帳面さだけは、両者に共通していた。一九七二年の十一月、幾志さんが亡くなった時、義理がたい竹内さんは、いそがしい時間をさいて、千葉までかけつけてくれた。竹内さんと私とをつなぐ一つの結び目に、幾志さんが位置していたのを、知っての上のことであつたらう。

都立大の教室では、少なくとも私は竹内さんのよい学生ではなかった。一年目の夜の授業では、竹内さんが、わずか二、三人の学生を相手に、中国語の発音を教えていた。それにも、私は何回かしか顔をささなかった。三年目につとめを

九五八年から「柿の会」という集まりを持ちはじめた。この会は、翌年から一九六三年にかけて、三十号の会報を出している。一九五八年春に大学を出て就職した私も、その一員であった。

ちょうど会報が最終号を出した一九六三年に、徳間書店から中国の古典を現代語訳する『中国の思想』全十巻を出す話があった。徳間にいた村山孚さんと、柿の会の守屋洋の立案であったと聞く。そこで柿の会のメンバーが中心になり、すでに都立大をやめていた竹内さんに監修をたのむことになった。ほぼ二年近くにわたった、この『中国の思想』の仕事に、竹内さんはかなりの精力を傾注したらしい。訳文検討のさいの竹内さんのシゴキぶりはものすごく、いまでも語り草になっているほどである。それについては、いずれだれかがくわしく語ってくれるだろう。(そのころすでに出版社づとめをしながら、雑誌『中国』小型版の編集を手伝っていた私は、これにも、またのちの北望社や第二次柿の会にも加わっていない。)

おかげで、出来のよかった『中国の思想』は何度も版をかきね、その基金をもとに、彼らは北望社という出版社を設立した。出版物はむしろ中国以外のものが多かったが、経営はなかなか大変だったようだ。そうこうしているうちに、北望社の主力は、翻訳集団としての機動性に移っていく。新しいメンバーも何人か加わり、二、三人あるいは個人で仕事をす

る者も出るようになった。何年かして、出版社としての北望社は解散した。だが、その翻訳と勉強のグループは存続しているの、しばらく前から、ふたたび「柿の会」と名のるようになった。いわば第二次柿の会である。

竹内さんの最後の闘病生活にあたって、この柿の会が身心ともに大きな援助をした。中国の会がなくなったあと、外部とのつながりを極度にせびめていた竹内さんにとって、柿の会が存続してくれていたことは、一つの救いであったと言えるかもしれない。柿の会の世代は、竹内さんの思想に傾倒したというよりは、人間的な側面にひかれ、しかもある距離をたもったつきあい方をしてきた。それがかえって役に立ったのであろう。

話は前後するが、私は都立大を卒業するさいに、万里の長城にゆかりのある孟姜女という女性の民間伝承を、論文として提出した。私としては大学生活の置き土産のつもりであったが、意外にも竹内さんからエスプリがあるとほめられた。その一年半後、中央公論事業出版にとめていた私に、竹内さんから、二、三年という期限つきだが、中文の助手になる気はないか、という話があった。いくつもの就職試験にふられ、やっとさがしあてた職場だったし、先行きの不安もあった、その時は「いぶん迷った」。

しかし、三年間の助手生活は、私にはじめて自由を味わわ

て、一九六〇年秋から、「日本のなかの中国」の共同研究がはじめられる。さらに一九六二年秋には、中国新書とその別冊付録としての雑誌『中国』の刊行が決められ、「中国の会」が発足する。そのころ、三年の期限が来て助手をやめ、校正者として岩波書店に入社した私は、つとめのかたわら、その雑誌の編集を手伝うことになった。

初期の中国の会の集まりには、竹内、尾崎、橋川文三の常連のほか、安藤彦太郎、新島淳良、野原四郎、野村浩一ら多士済々が出席し、談論風発で、じつに楽しかった。中国を知ることに必要性を、私はそこではじめて教えられた。そのわりに雑誌がおもしろくなかったのは、実務担当者の私たちと出版元の普通社が弱体であったためか。

やがて出版社がつぶれ、一九六四年夏に自主刊行で再出版してからは、今村与志雄さんと藤本幸三が編集陣に加わった。私が神戸大の教員となった一九六六、六七年の二年間は、この二人が実務を担当していた。再出版後、初期の共同研究参加者とのつながりがしだいに弱くなったのは、たがいの周囲の状況が変わったためとはいえ、残念でならなかった。

自主刊行になってから、有料部数は数百ほどであったため、竹内さん個人からの借入れという形をとった累積赤字は、四十八号で九十余万円に達していた。そのような事情もあって、一九六七年末から、徳間書店の申し出を受け入れ、判型

せてくれた。よくはわからなかったが、自分のなかに眠っていたなにかが、呼びさまされたという気がした。大学へもどった翌年が一九六〇年——安保改定の年であった。強行採決に抗議して辞表を提出する決心をした竹内さんは、「あいさつ状」の発送を助手の二人に頼んできた。研究室で一晚徹夜して投函の手はずをととのえてから、松井博光さんが、思いとどまってくれるよう最後の電話をしたことは、竹内さんの「大事件と小事件」にもしるされている。私はわきでその電話をききながら、もっと割りきった気持をいだいていた。

中文研究室の運営でも、竹内さんには、いい意味での独断専行といった感じがあった。大学の評議員としても、かなり積極的に意見をのべている様子であった。そのころの竹内さんは、どんな場に居あわせても、黙ってなどはいられなかったのだらう。このままでは、学部長か、総長か、いずれにしても、とにかく厄介な役職につかせられるおそれがある。少なくとも、はた目には、そう見える状況があったようだ。辞職をした竹内さんに、そんな思惑があったというのではない。ただ、いい時期にやめたと述懐した身近な同僚もいて、私もそれに共感したことを、書きとめておきたい。

大学をやめたあとの竹内さんの四苦八苦ぶりは、一九六二～六四年の日記抄に点綴されている（『転形期』創樹社）。その竹内さんを中心にすえ、尾崎秀樹さんあたりが導火線となっ

て、B六判からA五判に改め、ページ数もふやして市販することになった。部数は一万が目標であったが、実売は数千（それも少なめの）で終止した。それでも小型版にくらべれば、読者が一ケタはふえたことになる。

徳間書店とのかかわりは、もともと『中国の思想』からはじまっている。その資金提供で再々出版する雑誌『中国』の編集も、北望社が担当するのが順当と思われたが、それは同社の内部事情で実現しなかった。小型版のスタッフを強化するだけでは、相応きつい仕事であった。神戸から何度か往復して実情を見ていた私は、思いきって「東京へ行って編集を手伝いたい」と竹内さんに手紙を出した。竹内さんからは、「君がそれを望むなら」という返事がとどいた。私としては、副次的な理由もいくつかあったので、それを実行することにした。

徳間書店は、製作と販売の費用を負担するほか、月々三十万円を編集費として中国の会に渡してくれた。そのなかから、事務所の借り賃、専任編集者三人の給料、少額原稿料などをまかされた。小型版以来ずっとつきあう結果になった橋川文三さんにはもちろん、竹内さんにも、わずかな稿料のほかは、一銭の手当も出せなかった。考えてみると、ほぼ十年にわたる中国の会と雑誌『中国』の仕事に、竹内さんは無償どころか、むしろかなりの持出しで力を注いでいたことになる。竹内さんとしては覚悟の上ではあったらうが、いまに

して思うと、暗い気持にならざるをえない。その時期の無理が、雑誌休刊後の魯迅の翻訳の進め方に、はたしてひびかなかったかどうか。

徳間書店との最初の話では、赤字が一定額(三百万円?)に達したら、そこで統刊するかどうかを協議することになっていた。一年後にはその額をかるく超過していたらしいが、ついに五年後の休刊まで、赤字の件は徳間書店の側からは提起されなかった。徳間康快氏の度量に感謝すべきであろう。

それにもかかわらず、かんじんの雑誌の内容は、なかなか思うとおりにならなかった。専任の編集者は、私のほか、図書新聞をやめてはせ参じた大石(坂本)志げ子さん、それに、おもに会の活動を受け持った高橋泰子さんであった。根気のつづかない私は、一年もたないうちに、すっかり疲労こんぱいしてしまった。仕事にも自信をなくしていたので、時おり竹内さんの手渡ししてくれるポケットマネーまでが、かえって苦痛であった。

一九六九年に入って、平凡社の池田敏雄さんから、『南方熊楠全集』の校訂をやってもらえないかという話があった。そこで雑誌の市販前後から会に入りに入りしていた山下恒夫君に、半分ほど編集を手伝ってもらい、あいた時間だけ平凡社の仕事をするというもくろみをたてた。しかし、一年たっても前借金がふえただけで、まったく校訂には手がつけられなかった。やむなく翌年春、雑誌から全面的に手を引き、

それから四年間、『南方熊楠全集』の校訂に専念することになった。

新しい編集部は、山下君のもと、池上正治君、それに少し前から高橋さんにかわっていた吉田武志君(これはまもなく中村原君にバトンタッチされる)の三人となり、すっかり若返った。誌面にも相当の変化があった。私はごく部分的に編集を手伝うだけでよかった。あとは、ヒマな時に出かけていて、事務所にくる若い連中と飲んでさわぐのが、私に課せられた仕事となった。

中国の会にあらわれる顔ぶれも、この十年のあいだで、ずいぶん入れかわった。雑誌の変身につれて、少なくとも四回は大きな変動があった。もちろん、ごく少数の変わらない人たちもいた。その銘々伝を書きわたることができれば、竹内さんにとってのこの十年を、もっと浮かびあがらせることができると思うが、私にはとてもそれだけの力はない。

中国との国交回復後の休刊については、会の若手にかなり強硬な反対論があった。表立って竹内さんとやりあうという段取りにはならなかったので、内攻して酒の場が荒れたことも何度かあった。竹内さんが都立大をやめた時にも、それを翻意させる気になれなかった私は、この場合も、竹内さんの決意をつらぬかせるほかはない、と考えていた。戦争中に中国文学研究会を解散したさいにも、似たような葛藤が、竹内さ

んをめぐってあったようだ。竹内さんの一生は、そのような噴出と沈潜の反復で成り立っていたのかも知れない。「私には師もいないし、弟子もいない。私は天地の間にただ一人でいたい」と、竹内さんは日記抄に書きつけていた。しかし、一つの行爲があれば、そこに否応なく他者との関係が

生ずる。本人の意志にかかわらず、人々はつどい、かつ散ずる。竹内さんが、時として、それらの一切をかなぐりすてたい衝動にかられたとしても、それを責めることはできないだろう。

(いいくらしょうへい)

とぎれとぎれの思い出

松枝茂夫

竹内と武田がはじめて私を訪ねてきてくれたのは、昭和九年だったか十年だったか、当時の私はうらぶれ果て、尾羽うち枯らしていた。有閑無銭時代が際限もなくつづいていた。危うかしい綱渡りのような生活を結局私は八年つづけた。私は学生時代、昭和三、四年頃、中国の現代文学を熱心に読みあさったことがあった。二人はそのことを伝え聞いて、勧誘にきてくれたのだった。竹内はバリツとした瀟洒な背広を着こんで颯爽としていた。

当時私は阿佐谷駅から二十分ほど南へはいった成宗のはず

れに住んでいた。すぐ近くに金田一京助先生のお宅があった。先生はあの頃はまだ万年助教といわれて、暗い木蔭の古ぼけた家に住んでいらした。それにくらべると私の住んでいた借家は日当りのよい新しい文化住宅だった。「文芸展望」一九七五夏号に竹内と武田の対談「中国文学のころ」の中で、あれはあの頃の家賃で十円位じゃなかったろうかといっているが、いくら不景気で貸家があり余っていた当時でも、まさか十円ということはないだろう。たしか二十二、三円じゃなかったろうか。何しろ私は月収の半分以上を家賃につきこんでいた。

それというのも私はまんづくに定収入もないくせに、早く結婚して何人かの子供をもち、その上ガラにもなく沢山の書物をかかえこんでいたから、それを収容する容れ物が必要だった。私の応接間の壁一杯にずらりと並んでいた本は、竹内は「四部備要」だと思っていたらしいが、実は「四部叢刊」だった。そしてもう一つは、いとも恥かしいことに、「古今圖書集成」一万巻だった。私がなぜこんなバカバカしい本を北京から買って帰り、九州から東京に運び、東京でも大久保から高円寺、阿佐谷、荻窪と、大きな穀をしょったカタツムリのように転々と持ち歩いたか、これには深いシサイがあった、語るも涙、一言では尽くせぬから省略するが、竹内が、まだ学校出たてだったから無理はないとしても、このコケオドシにコロリと参って、学者はこうあるべきものよと感心しているんだから、まことに滑稽である。

あの対談には出ていなかったが、あの頃はアゴヒゲを生やしていた。多分そのことも竹内らのドギモを抜き、一見学者風に見せるのにあずかって力があつたのではあるまいか。私としては実はヒゲでも生やすより外に何一つすることがなかっただけの話である。第一理髪代が助かるではないか。私は棗斎と号していた。関羽の「面は重棗の如し」から来たものだ。その頃は親戚のある者から、最高学府を出ていながら、なんだまるでルンペンじゃなくと罵られて、腹の煮え返る思いをしていた。そんな貧乏も何十年後の今日ふり返る

どと言ひ散らして、温厚な実藤恵秀さんを驚かせ、実藤さんは今でも一つ話にしている。

吉村、千田、武田が応召、飯塚、竹内が北京へ行き、新聞社勤めの岡崎も地方に転出する。となると結局事務所近くに住んでいる私が留守をあずからざるを得ないハメになった。慣れない仕事を本郷の学生さんたちに手伝ってもらってボソボソやっていた。

ある日内務省の警保局(?)から呼出しの電話があった。何かほめられるのかしらんと思つて(ほんとにそう思つたのだった)いそいそと出掛けたら、えらく叱られた。私のそばで「作品」という雑誌の編集者も叱られていた。竹内の「北京通信」がいけないというのだ。『姑娘のスカート』が春風にひらひらと」云々という文句と、もう一か所は何だったか。あれがどうしていけないのかなど、首をひねりながら帰ったが、私にはまるで時世への認識がなかった。

五、六年前汲古書院から出た復刻版「中国文学」の別冊には、「ある廻状」と題したかこみ記事がある。これを見るたびに私は顔がほてる。郁達夫歓迎会の赤字を埋めるために、同人から一円ずつの献金を要請したのだが、私一人だけがどうとう一文も出しておらぬ。それが歴然と記録に残されている。同人費さえまんづくに納めぬくせに、私は研究会から逆に金を貰っていたことがある。もっとも現金ではない。研究会で講読会をはじめ、その第一回が「浮生六記」で、私は講師

と楽しいからふしぎだ。荻窪から四谷見付までのバス代十銭を家中限なくさがせどなくて、夕方五時から始まる授業にまだ日の高い昼間に家を出発し、成子坂を越え、新宿、四谷塩町を歩いて歩いて行ったことも今から思うと夢のようであつた。現実にはそんな呑気なものではなかった。

あの対談での武田の話によれば、私は本郷の桶屋の二階に下宿していたことになっているが、実は本郷元町の仕立屋の二階で、その右隣りが桶屋だった。毎朝時計が八つ鳴り終ったとたんに、見るからにガンコそうなじいさんが桶をトントン叩き出した。あの頃はすでに「四部叢刊」や「圖書集成」も整理していたし(その後東京外語の図書館に入ったと聞いたが、多分戦災で焼けたろう)、私の無計画な家庭生活も破産して、妻子を郷里にかえしていた。破れかぶれで別れてしまいたい気持ちだったが、文求堂のおやじさんにきつく異見された。

ここは本郷三丁目に近い和田ビルという紙屋の二階にあった中国文学研究会の事務所へ目と鼻の距離だった。夏の夜などはビルの屋上で涼みながら同人会議をひらいた。吉村さんが舌鋒するどく会計主任(?)の武田の事務の杜撰さを攻撃したこともあった。その夜は帰りの電車の中で武田は泣き通してあったと竹内が後で書いている。だんだん戦争が激化して同人の中から出征する者が続出した。文求堂主人の差し入れの酒で一杯機嫌になると、日頃口の重い私はついつもらぬ放言をしてしまう。おれは日本人に生れたことを恥じる、な

という名目で竹内から特別に電車の回数券を貰っていた。電車賃もなくてめつたに同人会にも出てこれぬ私の窮状を察してくれた上での処置だった。組織者として竹内はそんなところまで気をくばっていた。政治家だった。

「浮生六記」の初めの方に、作者は結婚の初夜の喜びを述べて「まるで親しい友達にでもめぐり合ったような気がした」と書いている。日本人ならこうは言うまい。どうして中国人はこんな言い方をするんだろう? 竹内にそう質問されて、講師先生はとっさに返事につまった。この時のことを思い出すたびに、今なら答えようがあったのにと悔む。竹内の言葉、文章に対する感覚の鋭さにはいつも舌を巻かせられた。あれは天性のものであった。

私の翻訳文は九州弁がまじっている上にドラダラしてしまりがなく、「棗斎調」といっていつも竹内にとっちめられ、バカにされていた。そのおかげで四十何年の間に九州弁はいくら減った(つもり)だが、ノンペンダラリは生来のもので中々直らぬ。

くやしき私に私は言い返す。竹内よ、お前さん自身の文章は実に簡潔で力強く、見事という外はない。ところが訳文となると、とくに魯迅の訳文となると、どうしてトタンにああも迫力のないものになってしまふんだね。魯迅のあの屈折の多い原文を読んだ時の感じと全くちがうではないか。あんなの訳は日本文としてうますぎる。あまりにも抵抗なく読者

の頭の中にすうっとはいってしまふ。そこが反って私には魯迅的でないと思われ、不満でならないのだ。私が自分のことは棚に上げてそういうと、彼はいつもウンウン、わかっているわかってる、そのためにこそいま苦勞してるといった。「魯迅文集」七巻の完成を見ずに中途で死んでしまった彼の無念さと思うと、やりきれぬ気持ちになる。

昭和十七年の春、私は上海、南京、蘇州、杭州、紹興とまわって北京へ行った。北京には竹内や飯塚らが大きな邸を共同で借りていて、梁山泊みたいに人の出入りが多かった。私も何日か厄介になった。毎晩酒盛りばかりして暮しているような様子だった。竹内は何度か北京を離れようと企てながら、そのたびに酒のために出発がのびのびになっていく。周先生は自分酒はのめぬのに、酒飲みのそうした酔態を見るのが好きだったらしい。周さんは竹内をひどく気に入っておられたように私には見受けられた。私は竹内と二人で兪平伯先生の宅を訪れたが、そのことは彼が月報に詳しく書いてある。

そのあと彼と開封へ行った時の楽しさが忘れられぬ。南京豆をかじりながら開封の町々を洋車に乗って見物してまわった。古行李の中をさがせば当時のメモぐらい出てくるはずで、少しは具体的に書けるかとも思うが、今その氣力が無い。ただ開封は戦争中とは思われぬ明るい活気にみちた町であった。それでいて「東京夢華録」にありそうな、昔ながら

スキーを持ってやってきて、私の前に坐っていた丸山真男さんに話しかけ、話しながらかなり酔っているらしい眼をチラチラ私に向けていた。それが私には睨んでいるように見えて、その時もすぐピンとくるものがあった。あの時の言葉を彼女は忘れていないのだなと思った。

というのは、私前にもいったが、一杯機嫌になるとつまらぬ放言をする癖がある。年をとった証拠か、前よりもひどくなった。自分でもわかっていながら、つい口を突いて言ってしまう。

近年来、大抵毎年一回、増田さんが大阪から上京すると、それを機会に昔の仲間が集まって飲むことになっていった。会場はいつも竹内が世話して吉祥寺の飯館だった。増田さんはこれが何よりも楽しみで上京するらしかった。

ところが六十、七十をすぎた人間同士、顔を合わせたときに始めるのは病氣と薬の話ばかりだ。実に徹に入り細にわたってウンチクを傾けあっている。私は聞いて面白くない。酒がますますなくなるじゃないか。いらいらするので、酒をガブガブ飲む。彼らは同じ話をまだつづけながら、私の顔を見ると、松枝が一番長生きするにちがいない、髪はまっ黒で、白毛一本ないし、入れ歯もないんだろ、とこうくる。好意にしろお世辞にしろ、こんなふうに言われるのが私はいやでたまらぬ。胸がムカムカする。おれだって高血圧の薬をのんでいるんだ。あんまりバカにして貰うまい。酒がはいっている

の古風な街の名が私を嬉しがらせた。

開封から徐州を経て蚌埠まで同行し、その駅前の旅館のくらい電灯(ランプ?)の下で汽車の発車の時間まで焼酎を酌みかわし、彼は上海へ、私はふたたび北上して済南に向うべく袂を分った。私はあんな楽しい旅をしたことはなかった。彼は理想的な道連れだった。

遠い昔のことはほとんど忘れてしまった。ただあの時は楽しかったなあ、寂しかったなあ、と漠然とした感じが残っているだけで、具体的なことは何一つおぼえておらぬ。ただしかし自分ではハッキリおぼえているつもりの場合でも、人間の記憶はなんとも頼りないものだと思う。さきに竹内、武田の対談についてどうでもいいようなイチャモンをつけたが、復刻版「中国文学」の別冊にある「中国文学研究会年譜」にしてもそうだ。あれは関係者が五、六回も会合を重ね、テープに取り、プリントしたものにみなで手を入れ、何年もかかってかなり念入りに作ったものであったのに、それにも拘らず誤りは沢山あるし、特にヒドイのは、あとで竹内の日記が出て来てわかったが、かんじんの設立の年が一年ちがっていた。

増田さんのお葬式がすんで、長泉院を辞するとき、武田の百合さんが私に「松枝さんは九十八まで生きて下さい」といった。この言葉は私の胸に突き刺さった。すぐにピンとくるものがあつたからだ。その数日前の竹内のお通夜の晩、私は右側の埴谷雄高さんと話をしていた。そこへ百合さんがウイ

ですぐ例の放言癖が出てしまふ。わかっちゃいながら、つい心安立てに言ってしまう。よし、そんならおれは九十八まで生きてやる。みんな死にたければ死ぬ。弔辞ぐらいはよんでやる。お前さんたちの若い時の幼稚な手紙はうちの信玄袋の中にちゃんと取ってある。お前さんたちが死んだら発表して大いに金儲けしてやります。よせばいいのにそんなアホなことを私はがなりちらしてしまったのだ。なんともバカな、思いやりのなき。現に武田は何年も前から目まいのする散歩をして、町中は一人歩き出来ない。竹内だって満身瘡痍、あれは氣力で生きていただけだ。増田さんもこの頃こそひどく元氣そうに見えるが、十年前に狭心症で死にかかり、今でも心臓の薬は常時持ち歩いている。それを知っていないが、私も実に心ない、罪なことを放言したものだ。武田の百合さんも竹内の照子さんも、あの時の私の暴言を忘れてはいるはずがない。まずいことを言ったものだ。いまさら悔いても仕方がない。しかし、たとえ九十八まで生きてたとしても、増田さんも竹内や武田もいない世界に生き長らえたとして、何の面白いことがあるのか。何の楽しいことがあるのか。

百合さんと照子さんが話していた。亭主はいなくても、あなたとあたしと二人手を組んでれば、天下に怖れるものなしだわね。そうですよ、その通りです。その意気で作って下さい。九十八は取下げにして下さい。お願いします。

(まつえだ しげお)

竹内好氏の逝去を悼む

一九七七年三月十日於・千日谷会堂

弔辞

増田 渉

昨年十二月八日の夜、突然武田泰淳未亡人から電話があり、「いい話じゃないですがね」と前置きして、言いくそに「竹内さんの病名がきまりました、癌でした」と聞き、事態の容易ならぬことを知った。その前に君が体が痛んで病臥していること、十キロも体重の減ったこと、そして入院したことなどを君の夫人との電話で知った。一週間くらいしてから、夫人に電話したら、その病院が気に入らぬとサッサと

退院したと知らされたが、再び



別の病院に入ったことは知らなかった。武田未亡人からはその後も度々病状について知らせをうけた。いずれ見舞いに上京しようと思っていたが、胃の手術のことを聞いて、猶予ならずと思い、同月十六日に上京して病床を見舞った。酸素マスクをかけ、外部の管から直接、胃の中へ栄養剤を注入する場面に接して、痛々しくて僕は殆ど口も聞けなかった。酸素マスクの中の君の声も殆ど聞きとれなかったが、ベッドの上に投げ出された君のつやつやした肉づきの手の甲を見て、「その手の甲を僕はしばらく撫でさずして、「別に痩せてはいない」と、なぐさめるように、はげますように言った。すると君は袖をまくって腕を示し、ここらが痩せていると、よく聞きとりにくい声だが、言った。すっかり肉が落ちて皺になった腕だった。見るに忍びず、僕はまたベッドを離れて椅子に戻り、ただ君の横たえた全身をボンヤリ見るだけだった。促

されて病室を出たが、この時が、四十数年に互るつき合いの最後の対面になるうとは。危篤を聞いて再び上京したが臨終には間に合わなかったことを許されよ。

顧ると昭和八年か九年、君が大学を出た年か、その翌年と思うが、ある日、君は僕の寄寓先に訪ねて来た。フサフサした黒い頭髮、瘦せぎすの体つき、真白い夏服で、瀟洒というか、颯爽というか、気鋭な青年の風姿であった。その日の君の姿は、いままハッキリ僕の目に印しついている。君より四、五年の先輩に当たっていた僕は、学生時代の君については知るところがない。後に大学の副手から君たちのことを聞いたし、その副手の紹介だったと思うが、君はその日、訪ねて来て「中国文学研究会」結成に参加するよう僕に勧めた。当時のわが国の中国文学研究に不満をもって僕は即座に参加を承諾した。ただその頃、僕は定職をもたず、時々上京したり、また故郷に帰ったりしていたので、研究会の初期のこととは余り記憶にない。

昭和十二年と思うが、僕もはじめて定職らしいものを得て、杉並に住んだ。君は「中国文学月報」の件などで時々僕の家に来たし、僕も研究会の事務所になっていた芝白金の君の家を訪れた。またわれわれ研究会同人は大い毎週一回は会合して親密に論じたり語ったりし、君の編集する「中国文学月報」に各人が寄稿し、それを批評し合って、いよいよ堅い結合体を形成した。そして精力的な君が中心にいた。

戦後、僕は関西に住むようになったが、年に一、二度上京した。君は大い僕の上京の日を見計らって、既に解散した「中国文学研究会」の旧同人を召集して懇親の会合を開いてくれた。その最後は昨年九月の初旬だったと思うが、閉会後に君の家に泊るよう僕は連絡をうけていて、愛飲しているという焼酎を飲みながら夜更けまで語った。話は主に『魯迅文集』についてであったが、君は毎朝弁当をもって小平の仕事部屋に通い、実働五時間は『文集』の翻訳にかかっていると聞いた。年齢からみて、やや過重労働ではないかと思っただが、既に老いて弱体の僕には、君の充実した精力が羨しかった。

だが九月の中旬頃か、夏バテらしく体調がよくない、内臓の疾患かどうか検診を受けるつもりだというハガキをもらったので、僕もそれを勧めたが、以来やはり体調は次第に悪化したもののように思う。

君が森本病院に入院して以来、君の友人植谷雄高氏は毎日見舞い、何くれと面倒を見られ、君も「植谷はまだ来ないか」と毎日、時刻になると待ったと聞く。植谷氏の並みならぬ篤い友情には感激した。また嘗ての受業生たちの「柿の会」の人々の献身的というべき尽瘁にも感動した。さらに君の病いのきびしいことから、カンパの企てがあるや、多くの人から予期以上の救援金が寄せられたと聞く。これ偏に君の清潔で骨の硬い魅力ある思考と人格の然らしめるところだというべきだろう。

命的イデオロギーと、『専』、すなわち専門的技術との対立と葛藤、この両方を統一する覚、すなわち指導者の立場だけで考えるのではなく、そこに『民』、すなわち一般人民の立場を入れて、考えをすすめられたのではないかと思ひます。でなければ、指導者意識、指導者根性に対する、あなたのあれほどねばり強い批判は出て来なかつたでしょう。ファシズムの中からファシズムを超えていく一般人民の立場をとり出し、コミュニズムの中から、コミュニズムを超えていく一般人民の立場をとり出される、あなたの情念と論理は、全国民が学びとらなければならぬ姿勢そのものであります。

書物におられるよりも、現実との対決をえらび、あとで書物に戻って、書物を読み直し、新しい諸意見をとり出したあなたは、対人的情誼や信義を重んじながら、事柄の折り目やすじ道を正すことを忘れず、その上に人権や正義の実現を計られたという意味で、まことに人生の生き方の一つのモデルであつたと思ひます。あなたの六十年安保闘争の正面の敵手であつた岸信介氏が、その後、あなたのアジア認識を聴講したいと切願したという話を耳にしたことがあります、そういう話があつても少しも不思議ではないでしょう。

あなたの欠落の場所をふさぐことは、他のだれをもつても出来ません。その意味では、あなたの逝去をいたむ思ひは、これから反って深まりさえするのではないかと思われま

君自身はいま精魂を傾けた事業半ばにして斃れ、残念なことだろうとは察するし、また長い看病につくされた夫人、令嬢の悲歎の大きいことはもとよりだと思ひますが、多くの人々の厚い友情による愛護と支持を知らば、君も以て瞑すべきではないかと思ひたい。

いま万感錯綜して去来し、文体をなさないが、これだけ述べて惜別の言葉として霊前に捧げます。

(ますだわたる)

弔辞

久野 収

竹内好さん、あなたの突然の逝去によって、われわれはいま、自分の内側に大きな空洞の生じるのを感じ、深い悲しみにとらえられています。

魯迅の翻訳を中途にしたままで、立ち去ることを余儀なくされた、あなた御自身にとつても、どれだけ残念であつたでしょう。ポードレールやブルーストの名訳者であり、あなた

と同じように、その名訳を途中でほり出して、立ち去らなければならなかつたワルター・ベンヤミンは、翻訳という仕事が原典の生命を別の国語、別の文化の中に再生させ、その生命をつづけさせるいとなみだといっています。あなたの魯迅の翻訳は、日本における魯迅の再生と永世を可能にするはずでありましたから、その中絶は取り返しのでない損失であります。

その上、毛沢東思想のこれからについても、われわれはあなたにもっともつと教えを乞ひたかつたのですから、その残念さはとても言葉につくせません。

あなたと同年代でありながら、ナショナリズムを国家主義やファシズムと単純に同視し、ナショナリズムにインターナショナルナリズムをただ対立させるだけで、反ってナショナリズムを国家主義やファシズムにとられてしまった私自身は、あなたから国家機関や国家機構を解体させ、再組織するナショナリズムの存在様式を教えられ、眼のうづばりがとれるのを感じました。インターナショナルナリズムにしても、そのような各々のナショナリズムのインターナショナルナリズムにはありえようはずがないと思ひます。ナショナリズムの力の論理から大同社会の連帯の論理へどう出てゆくかの問題が残されているにしても、この真理は疑えませんが、この方向でも、われわれ、国民は、あなたから、なお多くのものを学ぶ必要がありました。

中国の文化革命についても、あなたは、『紅』、すなわち革

す。

ただ一つの慰めは、あなたを尊敬し、研究し、あなたから学ぼうとする後嗣者たちが実に多く輩出してゐる事実です。生前からあなたほど、若い人々に注目され、論議された人物は、他に例がありませんでした。

私は、この後嗣者たちのむれが、あなたの残された仕事を引きつぐことを信じて、疑わぬいものです。

では、竹内さん、後輩の諸君の活躍をいつもの温容と同時に、きびしいまなざしで見守って下さい。

われわれ、同年代の同僚は、『成熟』とは何かを身をもつて教えてもらえなくなつたのにほぞを噛む思ひでいます。

(くの おさむ)

弔辞

田中克己

竹内好君
きみと僕とは昭和三年以来の永いつきあひで、竹内と呼び

すてるばかりで君の敬称をつけるのはけふが始めの終りだね。昭和三年の旧制高校の入試科目で、文科に数学の代りに歴史が入ったことが、京阪で学ぶことをかねた大阪高校志願の理由だったとは君の書いた文章では見つからないが、僕はさう睨んでゐる。東京府立一中から一高でもなく三高でもない煤煙の都市大阪をえらんだ理由は、その他には考へられないからである。

彼は文甲、わたしは文乙で、同じく文学を好むことを知つたのは大分あとのことだ、むしろ哲学青年としてハイデッガーなどを読んでゐたと思ふ。この人ありと感じさせたのは、三年の秋に発禁の書の固定読者の名簿にのつてゐる五人が、授業中に警察に連行されたことを発端としてストライキがはじまり、全員寮に合宿した翌朝、そろ／＼意気の衰へ始めた議論の最中に彼が立ち上つて、学校当局を非難し、ストライキを続行することを強調した時で、例の訥々とはあるが、全員を教へさす調子だったと思ふ。

但し処分を受けることも心配され、一向意気の揚らないことから、僕などは再挙を計ることを条件に、一応学校側の休校によつてストライキは収まり、処分者もなく、文科は甲乙を問はず話がまとまり、田辺元哲学の心酔者だった中島、松下などを残し僕たちは入試のあつた東大の文科に入つた。そのあと武田泰淳さんらとの交誼のことは他の方の方がよくご存じと思ふ。僕は彼に命じられて、その主催する中国文学の

弔辞

野間 宏

竹内好大兄

いま、また、大兄を失い、私は後に残されることとなつた。大兄であり大先輩であるあなたは、もちろんのこと、私より年長であるが、それだからといって、なお十年、私どもとともに生ききつて、その沈黙を中心のところに置いているきびしい論と批判をだし続けて下さる必要があつたと言ふことがこの私に許されないわけではない。これは私が自分に言いにかけている言葉でもあるが、私はこれを、私のごく近いところ、そしてきわめて遠いところに数多く、限りなく囁かかしてゐるのをききとっている。痛みはまことに深い。大兄は日本の多くの人々にとって、そしてこの私にとって、じつにかけがえのない重要な存在であつた。

もちろん兄は私を見捨てたのではない。日本を見捨てたのではない。もともと日本の奥所から、生れ出てこられたひと

民国三十年特輯号に、黄花岡の蹶起に参加して斃れた日本人のことを詠する詩をのせた。僕たちの愛する中国に対する侵略は、大学入学の年にはじまり、十年余りして、徴兵検査で第二乙といふ体格の彼が三十歳を越えて召集されたが、彼はその時あつといふ間に魯迅伝をかきのこしていつて僕たちをおどろかせた。丙種合格体重三九キロの僕が、同じく召集を受けたのは、昭和二十年三月東京大空襲のあつた翌々日、行く先は残念にも華中にゐた彼とは異り北京の近くで、十月現地除隊をし、翌年三月帰国すると彼の家を訪ねたが、彼は未帰還であつた。老兵の苦心、中国愛好者の中国人との戦闘などは彼は僕には話さなかつたが、いふ必要もないと思つてゐたのだらう。度々の入院の度に見舞にゆき、無茶をするなと戒めてゐた僕も、今度の病氣ではいふこともなく、体重四六キロときいて俺より重いとほげましたのが最後であつた。現在四〇キロの僕より六キロ重かつたのは、火葬場で彼の骨の太いのを見て納得した。再び得がたい友だちを悼むにはあまりに粗雑な文章だが、七十になつたら北京へ同行するつもりだつた僕としては、意余つて言足らざるを残念といふより外ない。御冥福を祈る。

(たなか かつみ)

であつて、いかに、兄が日本を見捨てようとする一方の手をもつてすすめられたとしても、すでにその時兄の他方の手が、そのさかきの作業をはたされることになるのは、いうまでもないだらう。とはいえそれは決して正・負、零の作業ではない、両極をそなえた作業である。つい先日私は、頂いた兄の新訳で魯迅の「狂人日記」を読んだ。狂人の身をかりて人間食いについて問いつめ、当時の暗黒のなかに立っている魯迅を改めて見つめ、それに近づいて行くことが、これによって私にも可能となつた。訳文は原典を徹底して読み切り、同時に自己を切った、久しく見るものなかつたものである。

ひとを食う恐ろしき、そして食われる恐ろしき、のいずれをも知つていた魯迅を媒介にして、竹内好さん、大兄は現代の日本、いまの日本の到来することを、ずっと以前に予知してられたにちがいないと考えられる。人類の生存とは何かということ、それをきゆう局のところまで問いつめつづけてこられた兄は、生存を生存競争として生物学的にとらえる魯迅の考えを、かつて私に話されたが、いままたその言葉が、この私に黒く輝く光を放つたかのように、見え聞えてくる。それは大量死を目の前に見てきた魯迅を媒介として、引き出して来た考えであり、今日の人類を見る眼を明にしているものである。

しかし私はここに、竹内好さん、大兄の日本の戦後作家について述べた文章を引きだしておかなければならない。それは『阿Q正伝』の「世界性」という表題のエッセーのなかの一

文、しかもカッコにつつまれている一文である。「魯迅には青春がなかった。かれの青春は、失敗の連続としてかれの意識に刻まれており、かれの『絶望』（魯迅の絶望にくらべて、日本の戦後作家の絶望が、どんなにたあいがない、にせものばかりだろう）を形成している。」これは一九四八年七月に書かれている。

私はいま、これは一九四八年七月に書かれていると書いたが、それはなにも、その後竹内好さん、大兄の考えは変わったなどと言おうとの考えから、でているのではない。……そして私は、大兄の病気の急激な悪化を耳にして、病室を見舞った。寝台の上の兄は、上を向いたまま、インドネシア旅行をする計画がすでにすすんでいること、それをどのようにするかについて、うわ言をつづけていられた。とはいえそのうわ言は決してうわ言などということの出来ない、論調のたかいものであって、私の全身を冷ました熱くした。

しかしそのような言葉を発しながらも、竹内好さん、あなたは、私があなたの真近に行き、寝台のすぐ傍にあるソファに掛けて、そこにいることを、はっきりと知っておられた。その身体は私が考えていたようには、決して衰弱していなかった。その大きな頭蓋は、依然として、その深く大きい智慧をはたらかせていると感じとられた。その手は、柔かかった。私はお疲れになると感じて、立上り顔を近づけ、かえりますから、どうかお大事にと声をかけた。有難うござい

ます。とあなたは、礼儀正しく、しかも、まことの親しみのこもった声で言われた。別れはまことに、何にもまして、つらく哀しい。しかし竹内好さん、大兄の自らいわれている「悪の悪」を底にすえたその鋭き限りない論は、人類のなにかふかく、すでにとどいてる。

(のまひろし)

謹んでわが師 竹内好先生を弔う

谷口修太郎

竹内先生、竹内好先生。私にとって先生とよべるきわめて数少ないお一人であるあなたに対して、いまここにお別れを申しあげなければならぬことは、哀しみの極みであり、くやしい思いでいっぱいでありませぬ。

竹内先生、私はここ二十年余、先生から数多くのお教えをいただいできました。それは敗戦後、先生の著作から活字をとおしてありますが、面識をえて直接お教えをいただくようになったのは、たしか一九五四年、「魯迅友の会」に加え

ていただいでからでありました。その私が、竹内好を師とおおぎ、先生とよばれることを好まなかったあなたを自然と竹内先生とよび出したのは、部落解放運動における先生のお仕事をとおしてでありました。やがて私は京都にあった部落問題研究所に入り、その機関誌の編集担当として、先生のお宅にうかがうようになりしました。一九五八年の秋からでありませぬ。そこから「沖繩から部落まで」のすぐれた提言をいただきました。竹内先生、あなたは、ただこわれて原稿を書いたというところではありませぬ。部落差別の問題をとおして、日本のおかれている現実と、その解放をとおして、日本人の進むべき方向を見定めた、すぐれた視点としっかりした思想の上になつたことでありました。先生は書いておられます。「なぜ部落問題に関心をもつのかといえば、日本の社会の問題、日本の文化の問題、ひいては文明観を考える上に、部落問題は絶対にはずしてはならぬ視点だと思ふからである」と。また先生御自身にとっての部落問題とは、「学問研究の一つの特殊分野なのではなく、あらゆる学問分野をつらぬく普遍的な課題であり、そこで学問の真理性がテストされる場の重みをもつ存在である」とも。そしてまた「部落を除外して社会を考えることはできない。また芸術の創造を考えることはできない。そういう要の位置を部落問題が占めているのではないか」と。

現在、部落解放について多くの人たちが発言するようにな

っています。先生はすでに二十年前に、こうした視点をもつて、何よりご自身の学問と思想をより深めるために、部落差別との積極的なかかわりをはじめられたのであります。先生の歴大なお仕事からみれば必ずしも量は多くありませんが、たび重ねて部落差別とその解放について発言してこられました。一時期「差別を考える会」を自ら発案し主宰されたこともあります。あまり世に知られていないこれら先生のお仕事については、やがて明らかにしなければなりません。その中からいま私の眼にある一つのことごとく鮮明によみがえっております。

私は、部落問題研究所にひきつづき、一九六五年から部落解放同盟という大衆団体にかかわるようになりました。その中で、私が企画推進の中心になってすすめた部落解放研究活動、その全国的な集約としての研究集会は、先生のお力に大きくあずかっているというのであります。どちらかといえば幅の広さで充分でなく、また力もちながらそれをうらづける論理がわからない一面をもっている部落解放運動を、よけり国民的な課題としてひろげ、多くの人が納得できる理論創造をめざした大衆的基盤による研究活動であります。そのころみをもって私がお教えを受けにかがったとき、文明論への指向の不充分さと、みなを自由に論議できる場の保障、その上に立たなければならぬことをきびしくご指摘いただきました。やがて研究集会は発足し、六九年、第三回の岡山集

会に、「人間の解放と部落解放運動」をテーマに記念講演を
 いただいたしております。それから一年一回おこなわれる研究集会
 に、福岡、大阪、広島とつづけて四年間、まさしく身ぜにを
 きってご参加いただきました。毎回三日間の日程を、最初か
 ら最後まで参加されました。小学校の講堂の板ばりの小さな
 椅子で、中学校の体育館に直接すわりこんで、終日討論に参
 加された竹内好の姿は、私にとって大きなおそれと深い感動
 でありました。

日本の重石とまで表現された偉大な思想家が、魯迅の研究
 者として世界的ともいえる名声をもつ竹内好が、部落のおぼ
 ちゃんやおっちゃん、そして部落の若者たちと、ともに論議
 し学習する姿。差別に苦しむ立場からの話を聞き、勉強する
 ために来たとおっしゃる先生は、宿舍さえお世話させてはい
 ただけませんでした。自らの問題として、学ぶという姿勢を
 つらぬかれました。魯迅の文学をとおして、もっとも下積み
 の人たちの立場にたつ先生は、御自身の勉強のために参加さ
 れ、ただもくもくと部落の側からの訴えに耳をかたむけられ
 ました。私はこの竹内先生を通して、全く新しい解放の人間
 像を見る思いでありました。

先生は、この研究会に参加なせることが楽しみでもおっ
 しゃられました。ここには生きた人間がいる、ということでも
 ありました。おそらく、部落解放というすぐれて人間の解放
 をめざすたかひの場にこそ、ほんとうの生きた人間を創造

えております。

竹内先生、人間としての痛みの多い側に心と体をおかれて
 生きとおされた先生、どうか、部落解放に生きようとする人
 間を変らず見守っていただきたいと存じます。

(たにぐち しゅうたろう)

弔辞

鶴見俊輔

戦争前の竹内さんのことは知りません。戦争中の著作も読
 んだことがありません。戦争が終ってから、できてはつづれ
 る小さい雑誌の中に竹内さんの文章を見つけました。

「総合文化」という薄い雑誌にのった「指導者意識につい
 て」という短い文章を、今まで読んだことのないものよう
 に感じました。この文章ののっている雑誌を五冊買って人に
 読んでもらったことを思い出します。会ったことさえない竹
 内さんのためにその思想を宣伝するというのでなく、自分が
 この文章をよりどころにして新しいところに出てゆきたいと

できる、そうでなければ部落解放運動ではない、という私へ
 のおしかりであったのかも知れません。

竹内好先生、私は先生から多くのお教えを受けました。部
 落解放の場でこそ、人間の生命を大切に、権利を守り、生
 きていく上で必要なさまざまな価値をつくり出し、そしてこ
 こでこそ、人間と人間の真実の関係をくり出す連帯が確立
 できるのだと考えます。そのためには、人間としてのやさし
 さや思いやり誠実さと、謙虚さそして自己に対するきびしき
 をもちつづければならぬはずで。こうした解放の原則
 と基本にたつて、部落差別に対する自己のおかれている立場
 の自覚、差別の科学的な認識、その上にたつての解放への的
 確な行動、そのための解放の主体形成、それらを通しての人
 間の変革という、私の解放の論理は、先生から学んだことで
 もあります。

竹内先生、あなたはもうこの世の人ではありません。それは
 天の摂理とはいえ、なんと無情なことでありましょう。もう先
 生と議論のみそして議論することは出来ません。京都での
 竹の子がりや松たけがりの約束を果すことはかないません。

しかし先生にお教えたいただいた教えを、これから私なりの
 生き方に生かしていきたいと思えます。さしあたって昨年
 十月、先生とお約束しながら私の力の不足のために果してい
 ない、先生の差別にかかわる発言を一冊にまとめる仕事か
 ら、ご遺族ならびに関係者のお許しの上で、はじめたいと考

思い、そのことを友人と話しあういとぐちとしたかったので
 す。そこには啓蒙という思想の潮流とは正反対の思想の流れ
 があらわれており、戦後の、すくなくとも論壇からはみだし
 た見方でした。私にとつても戦後は、竹内さんの文章を読む
 ことからはじまりました。

もう一つ、「知性」という国土社から出ていた、これも薄
 い雑誌に「中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識」という文
 章を見つけて、この時も五冊買いました。五冊というのはそ
 のころの私の財力だったようにおぼえています。この文章が
 中国についてあたってあるかどうかは私にはわかりません。
 しかし、そこから日本文化に対する適切な見方があらわれて
 くるように思いましたし、今もその考え方に私はついてゆき
 たいと思えます。

竹内さんの文章をのせた「総合文化」も「知性」もすぐに
 つぶれてしまいました。竹内さんの戦後の『魯迅』を出した
 世界評論社もつぶれました。戦後のつぶれた小さい雑誌の切
 れ目にその志の断面が見えるような気がします。

竹内さんは戦後の『魯迅』の中で、傷を信じることを書き
 ました。自分に傷をおわせた相手を信じることができなくとも、
 自分の傷を信じることはできる。傷の中には今を生きる
 力がある。

六〇年の安保闘争の後に、竹内さんは小さい新聞をつくる
 ことを考えてそのための会をつくり、中国との国交回復のな

い時代に中国の会をおこしました。それらの活動は終わりました。戦後の自分のした仕事はすべて失敗だったと言われたことがあります。同時に、人間のすることはすべて失敗で、失敗のわをつなぐところに、ともかくも、今生きる道はひらけてゆくと信じておられたように思います。

「思想の科学」も戦後の小雑誌の一つで、その何度もの失敗と転倒にさいして、竹内さんが力をつくして助けられたことを、私は忘れることができません。

失敗をきりわったところに未来が見える。すくなくとも今から未来へと自分の歩いてゆく方向が見える。そういう考え方を、竹内さんは、話し相手の傷口をおしひろげるような仕方ではけつしてつたえられなかった。いつもおだやかで言葉数すくなく対していただいたことをおぼえています。一緒にスキーに行ったりした、たのしい思い出もあります。竹内さんは私に友人としての座席をあけておいてくださったように思います。私はのびのびと友人と一緒に遊ぶということはできないで終りました。敬意というものが、私の邪魔をしてきたことを残念に思います。

(つるみしゅんすけ)

歳を越えたかれは、あらためて中国語を習って、自分にも人並みの発音ができることを発見しました。かれは発音が下手だったのではなく、恐怖におびえていたのです。

ほどなく先生は学校を去り、わたしたちも卒業して、中年へそして初老へおきまりのコースをたどることとなりました。ここでわかれわかれになってしまえば、また別の人生があったでしょう。しかし、それではおさまらないような気持ち、わたしたちにはありました。急に重石をはずされたのは、不安だったのかもしれない。先生のほうも例のサービス精神を発揮されて、アフターサービスをしようと思われたのではないのでしょうか。ひょんなことから、わたしたちは先生といっしょにほんやくの仕事をやることになったのです。

思えば、これからが大変でした。善福寺の池にボートを浮かべ、身投げの相談をした男ふたりもいました。

「お嫁にでも行きなさい」といわれ、ほんとうに結婚した女もいました。

吉祥寺の竹内家の前、あの細くて長い道をどれだけの人間が、力ない足どりで歩いたことでしょうか。

アフリカの草原では、縞馬たちが頭を寄せあつて円陣をつくり、ライオンから身を守るといいます。わたしたちはその縞馬のように、よりつどって防衛につとめたのです。しかし頭をひくくしてやりすごしているうちに、わたした

弔詞

市川 宏

七年間に先生の教えを受けた学生は、中国文学専攻ということであれば、三、四十人もいるでしょうか。なかに優秀な学生もいたかもしれませんが、大部分はだめでした。だめの集合を代表して弔詞を読みます。

最初、先生から受けた印象は、もの判りのいいおじさん、いつも上機嫌でサービス精神に富んだ、おもしろい人というところでした。だが、その印象は、永つづきしませんでした。どうも様子がおかしいのです。たとえば授業のさなか、ふと沈黙がはじまって、いかに座をひきたてようとしても、もうとり返しがつかない。発言するもの、みな声がうわずって、語尾がどこかへ消えてしまう。先生のまわりでは、よくこんな現象が起きました。

中国語の発音の下手な男がいました。先生から「あなたのはどの音もみな同じだ」といわれたのですが、最近、四十ちは先生の、気がよく、むじゃ気でやさしい面に、あらためて気づくようになったのです。よくよく観察すると、先生のなさることのひとつひとつに面白み——一種の愛嬌があります。

一日がかりで登った乗鞍岳から、スキーで滑りだしたとたん、先生は骨折してしまいました。せめて半分下りていくればよいのですが、一行の声なき声でした。

骨を折らなければスキーを折り、ついには、どうして折ったのか、ゲレンデでくわえたパイプを折ったものです。

朝早く、むかいの旅館が火事になれば、みなを起こして、カメラを手にもったききにとびだして行かれました。氷った道に足をとられ、転倒された姿が目にかかびます。

たしか、ライオンとネズミが仲良くなって、いっしょに暮らすという童話がありました。ちょうどそんなふうに、わたしたちは先生になれ親しんでいったのです。

縞馬になったりネズミになったり、こわくもあれば楽しくもあって、思えば、話題にこと欠かぬ毎日でした。

長いあいだ、ありがとうございました。いよいよ重石がなくなつて、わたしたちはあちこちをただようことになるでしょう。天国で苦笑いしていただくほかありません。

(いちかわひろし)